

今でいい、

これでいい

アン・サリー



掲示板のことば

想像していた未来の自分と現在の自分について親がたまに話している。

若い頃は70代80代の方々を見ると、自分もいずれは趣味を楽しんだり旅行をしたり、のんびりと過ごしたいと思っていたそう。

しかし、いざその年代になってみると、一見のんびり過ごしているように見えていた人たちも肉体面、精神面、経済面など、様々な問題を抱えて生きていたのだろうということがわかってきた。状況や環境、様々な理由で自分の思い描いていた老後からは離れていつていると話してくれた。

私も歳を重ねるにつれ、人との外出に少し身構え

ることが増えてきた。基礎体力の無さや急な体調不良が原因で、出先で相手に迷惑をかけたり気を使わせてしまうかもしれないと思うと、一人で休憩を取りながら気楽に出かける方を選ぶことが多くなった。その日の体調など何も考えず出かけていた頃が懐かしい。

今出来ること、出来ないことにその都度向き合いながら、その時々で自身の精一杯を生きているつもりでも、なかなか「今でいい、これでいい」と自信を持って言い切ることが難しい。それでもこれまで歩んできた自分の道を確かめながら、「今でいいのかも、これでいいのかも」と、思い通りにいかない現実を受け入れつつ、ただ進んでいければと思う。

(大阪教区教化センター)

今月のことば

七宝の宝池いさぎよく

八功德水みちみり

無漏の依果不思議なり

功德蔵を帰命せよ

宗教儀式やその教えには水に関する表記が多い。イスラム教やヒンズー教では沐浴を勧め、キリスト教の洗礼も同様である。これは水が生活に重要であるからだろう。今日でも電気やガスの料金を滞納すれば供給を止められるが、水道だけは極限まで止められることはない。直ちに生きていけない事態に発展するからである。

ある国にこんな話が伝わる。他国から来た首相や兵隊が水道の蛇口をひ

ねると水が出てくることに驚き、慌てて蛇口を買って壁に取り付けてみるが、そこからは水が出てこない。そのことで「不良品を売った」と、

店に対して抗議したという笑い話である。これは他国より自国が進歩しているという自慢も含めた話で、私は成長過程にある国がこういう話をするのだと思っていた。しかし、日本でも上水道に限れば昭和30年代前半での家庭への普及率は50%にも達していなかったと知って驚いた。

仏教の起源であるインドでも、清浄な水を手に入れるのは非常に困難で「八つの功德の水」とい

そのまま飲んでも良いほど安全で清浄な水が「功德」を表すものとして浄土三部経に表現されていることに納得をした。

それほど重要な「功德」について親鸞聖人は、和讃後半で「煩惱の無い浄土の思い計れない徳」と表現された。これは、自分の思い通りにさえ生きられたら、「それが幸せである」と思い込む煩惱にまみれた私の事実を明かにし、み教えに照らされた「本当の自分」に出遇うことを願われる言葉だろう。それは私の常識がひっくり返されることである。我々が求めていたものは「水の出ない蛇口」だということに気づかされるのである。

昔から、愛媛県には「学

校の蛇口からみかんジュースが出る」という都市伝説があったが、現在、松山城付近の学校を改修した施設には、みかんジュースが出る蛇口が本当にある。また香川県の高松空港にある蛇口からは無料で「うどんのだし」が出る。これは常識をひっくり返す楽しい話だが、親鸞聖人のいう常識とは、人生全てが自分ファーストであるという「私の常識」である。「功德蔵を帰命せよ」とは、親鸞聖人ご自身が「阿弥陀如来のみ教えを根拠にせよ」とお聞きになられている言葉だろう。

(新川 隆教)

今月のことば出典『浄土和讃』

『真宗聖典』(初版) 482頁

(第二版) 577頁

『増補 真宗大谷派 勤行集』

(青本) 125頁

へ知ってる？ 仏事のあれこれ

「ご命日」を

大切にしましょう



共にいます 阿弥陀仏

西宮市 念佛寺 土井 紀明

「命日」は先人の亡くなられた日のことですが、この言葉から「いのち(命)の日」という意味もありましょう。

私たちのナマのいのちはいつでも「今ここ」にしか存在しません。一時間前はすでに無く、一時間後はまだ来ていません。いつでも「今」だけがあるのです。そして私が実際に「いる」のは、今考えつつある「ここ」だけであって、沖縄や東京にいるわけではありません。

こうして日々は「今ここ」の連続のほかにありません。その中で喜んだり悲しんだり、安心したり不安になったりしています。が、こうしたさまざまな思いに先だって「今ここに生きている」という根本的な事実があります。

そして今ここに生きているのは、私たちがいろいろ考えたり計らったりするから生きているのではなく、我ならざる無量の無数の働きによって生かされているのです。空気

がなければ、あるいは太陽が照っていないければ一瞬も生きられません。そのほか水や食物などがなければ生きられません。身体も自分の造ったものではなく、心臓や肺も寝ている間も動いてくれるから生きておれるのです。心の働きも同じです。ひと思い・ひと思いが連続している、この心の起る力は我ならざる働きです。その証拠に心の働きを自分で止めることはできません。こうした生きている条件を広げますと宇宙にまでひろがります。私のいのち全体が我ならざる働きによって生かされているのです。そういうはかりないいのちの働きを寿命無量(阿弥陀仏)というのでしょうか。

阿弥陀仏は、私のいのちを今ここにあらしめてくださる働きですが、私はこの阿弥陀仏を忘れ、何とも思わず、自分の願望やおもんばかり、いわば「ああなりたいこうなりたい、ああなっては困る、こうなっては困る」というような実体のない「思い」を中心に生きていて、ナマのいのちそのものを見失い、いのちの芯が空虚になっているのです。

そういう私たちに阿弥陀仏は「南無阿弥陀仏」という言葉となって常に喚びかけ、「汝のいのちの親がここにいます」「お前をまるまる抱いている」と告げ知らせ、私の人生全体を支えていることをお知らせくださるのです。



仏教マンガ・仏さまのおしえ



絵：小川ゆきえ〈247〉

